

中国水工環境コラム 第46回 (2024年1月)

執筆者：中国水工（株）環境アドバイザー 大田啓一



世界から見た日本の教育

昨年（2023年）12月5日のNHKテレビはピザの結果を大きく報道していました。ピザはPISAのことで、OECD（経済協力開発機構）が行う国際的な学習到達度調査です。3年ごとに行われ、対象は15歳の生徒です。今回の報道は2022年に実施された結果についてで、これには81の国・地域から約69万人、日本からは183の高校・高専の一年生約6000人が参加しました。

PISAの出題分野は、毎回、数学および科学の活用能力（リテラシー）と読解力です。日本は3分野すべてでトップ5に入り、特に、苦手の「読解力」で前回の15位から3位に上りました。「数学的リテラシー」は6位から5位に、「科学的リテラシー」は5位から2位へと順位を上げました。

先日の新聞に数学的リテラシーの問題の一部が載っていました。その一つは、あるバスケットボールチームを称える新聞記事の見出しで、チームが今シーズンの全試合で勝利し、得点差の平均は19点であったことがわかります。質問はこうです。「得点差の平均を踏まえると、このチームが実際にはどの試合でも19点差で勝ったことがないということはありませんか」。答えは、「はい」か「いいえ」の選択と、その理由の説明です。皆さんの答えはいかがですか。なお、日本の正答率は26.6%でした。

この問題のように、数学的リテラシーは実生活の中の数学的側面を扱います。PISAと一緒に生徒へのアンケート調査を基

に、日本の数学の授業は日常生活との関連付けが薄いと、OECDは指摘しています。実生活に関わる授業が生徒の関心を引きやすいことはわかっていますが、そのゆとりがないのが教育現場の実情です。

もう一つ長年の課題とされてきたのは、生徒の「自ら学ぶ意欲」が弱いことです。今回の調査で、「学校が休校になったら、自力で学校の勉強をこなすか」の問いに、その自信があると答えた生徒の割合はOECD加盟国で最下位でした。この状況は読書に費やす時間でもうかがえます。山口県教委の調査では、学校以外で月に一冊も本（漫画を除く）を読まない県内の子どもは小学生で29.4%、中学生は35.6%だそうです。

では、大学生はどうでしょうか。1日の読書時間は平均33分で、その中には0分の学生が46%もいるようです。また、予習・復習などに費やす1日の勉強時間は、2019年が48分、2022年はコロナ禍の影響で62分に増えました（全国大学生協連、2023）。

欧米の大学生は、毎日の受講数が3科目くらいで、あとはほとんど図書館に居ます。自習時間はざっと10時間、インドで6~8時間が普通です。中国でも韓国でも図書館は学生で埋まっているのを私も見てきました。それくらい勉強しないと授業についていけないからです。日本の授業は易しすぎると留学生は言いますが、今日、大学の授業のやり方と中身は徐々に改善されつつあることは付記しておきたいと思います。